

序 章

北タイ山地で住み込み調査を始めたのは、一九八七年のことだった。その後の二十年間、タイは開発と成長を経て経済危機を経験する一方、国民国家統合への自信を深めていった。ここではこの間、特に八〇年代から九〇年代を中心に、「山地民族」として再編されていく過程にあった北タイの「カレン」と呼ばれる人々に焦点を当てる。彼らを取りまく政策や言説を背景に、日常的な生活実践の中で、民族とジェンダーという差異がどのように交差しつつ形成されてきたのか、その様態を描き、分析する。民族とジェンダーがその交差するところで相互に実体化されることに着目し、その交差する地点から、差異の形成と変容のダイナミズムを検証する。ムラの日常生活は、グローバル化のただ中において、より広い地域のエスノスケープに位置づけられる。上から名づけられた差異の体系のもとで、人々の関係が、日常実践の繰り返しの中でどのように規定、再規定されてきたのか。以下では、こうした主題を読み解く枠組を検討する。

空間と時間のとらえ方——周縁と変化を問う

この本の舞台となるのは、タイ国家の地理的・社会的「周縁」とも言える山地である。中央権力によって少数民族が周縁化され他者化された過程（二章参照）は、タイという国民国家が確立されていく過程と表裏一体であった。したがって、周縁の経験を描くことで中心のたどった過程もみえてくる。しかし、そのように中心に対峙する周縁という見方にとどまれば、周縁はある種囲い込まれた空間でしかない。それによって、中心対周縁という構図の中では説明しきれない、その構図で包含しきれないローカルな場の動態を見落とすことにならないだろうか。

周縁から中心がどのように想像されるかを検証することで、中心と周縁の構図を相対化するツインの民族誌（Tsing 1993）は、周縁のさまざまな可能性をみせてくれる。一方、近代国家における女性の本質化を批判することを目的とする編著の中で、アラルコンらは次のように論じている。すなわち、周縁と中心の対置は、ヘゲモニーを強化するのであり、「周縁から語る」ことは、現代の政治状況において不可避にみえるが、それによってすでに国民国家の言説に自ら従うことになる、と。そして、中心と周縁の脱構築を理論化することが、不可能な統合を可能にする、と述べている（Amarón, Kaplan and Moallem 1999: ②）。いずれも、一方的に規定された中心と周辺の構図を脱することで、支配的な語りのオルタナティヴを模索することを主張している。また関根は、自他の「境界」こそが、自己が自文化から解放され、他者と共振できる場であり、支配的秩序の「中心」にあった視点が、その視点からは「周辺」と認識した場所に自ら移行し参入することで「境界」の視点を獲得し、他者了解が達成されることを指摘している

(関根 2006: 20)。これも中心と周縁の語りへのオルタナティブの主張である。

国家や中心からの名づけという視点ではとらえきれない、ローカルな場面における実践を拾うこと。

そこでは、中心の支配的な言説にとらわれない差異の多元化を見出せるのではないか。中心と周縁の関係性から生み出されるものを確認した上で、そこを外れて、広がりゆくエスノスケープの中で別の関係性の形成をみることを目指したい。

さて、儀礼実践を中心とする生活の変容をみたい、とカレンのムラに調査に入った私には、当初、本来のものとしての「伝統」と、「近代」に特徴づけられる変化の産物とをより分けるのが最もわかりやすい見方だった。しかし、絶え間なく変化する現地の状況を見るにつけ、そうした平たい歴史観に修正を加えるようになった。彼ら自身はその慣習や儀礼を、「祖父母の代よりも前から、このようにしてきた」と説明するが、調査の中心となったセニヤキの歴史を聞き取ってみても、ムラができてたかだか四世代、一世紀に満たず、それ以前は別の土地で異なる形の生業を営んでいたものであり、その中で、彼らの慣習と呼ぶものも、その時々状況に対応する形で変化してきた。そうだとすれば、変化として語るに値するものは何なのかを問わなければならない。

西洋社会科学の大理論における時間の概念について批判的に考察するアパドゥライは、それら理論がある一定の近代のモメントに過去と現在の間のドラマチックで従来全くなかったような断絶がもたらされた、という時間感覚を私たちの中に強化させてきたと指摘する。そして、伝統と近代の相違としてそれを類型化してきたのだ、と (Appadurai 1986: 2-3)。この見方によって、変化の意味や「過去性」の政治学をねじまげ、近代は無意識に「伝統」という「過去」を作り出してきたのである (Hobsbawm and Ranger (eds.) 1983)。

近代への道筋も、グローバル化も、否応なく一方向的なものであるとしても、現場でみる変化は必ずしも一方向的に突き進んでいるわけではない。人々が語って聞かせる代々受け継いできた慣習があり、他方で、彼らの語りから読み取り聞き取る生活の変容がある。その両者に折り合いをつけ、変化と持続に関して自分の目にかかったバイアスを克服できているのか。その後、何度も村を訪れて山地の目覚ましい変化を目の当たりにする中で、この問いを繰り返した。山地の生活は、それを取りまくさまざまな経済的あるいは政治的社会的な状況に大きく左右されている。しかし、こうした事態は、時の流れの緩急はあるにせよ、今に始まったことではない。変化そのものを相対的にとらえ、後戻りできない変化が何であるのか、持続するものは何なのかを見据え、ヘゲモニックに分割された時間と空間を再考したい。

差異へのこだわり

差異へのこだわりは、他文化理解の学としての人類学において常に核を成してきた。しかし近年の人類学では、文化と差異へのアプローチは根本から問われ、逆転してきた。無垢なる差異をそれぞれの文化の中で文脈づける、という他文化理解が前提とする、実体としての文化への徹底的な批判がなされた。あたかも実体のように文化を語ることににより「特定文化」に内在するあらゆる差異を隠蔽してしまい、なされるべき探究そのものを阻んでしまっている、という批判である。古典的な人類学における文化と個人に関する考え方で言えば、文化は個人に先んじて存在し、個人は特定の文化的文脈の中で社会化される。この見方の背後には、文化間やカテゴリー間の差異にこだわる一方で、文化やカテゴリー内部の差異について目を閉ざしてきた人類学の文化理解があった。これでは社会と個人の相互構築やアイデン

ティティ獲得・形成の過程は理解できない。

それでは今、差異についてどのようにアプローチすれば良いのか。アパドウライは、文化の対象化を回避するためにも、むしろ形容詞としての「文化的」を用いて、状況限定的に意味ある差異を強調することで、実践、区別、概念、イデオロギーやモノの文化的次元をとらえるという方向を示す。そこで、何らかの集団のアイデンティティを動員するために強調される差異を文化的差異とする (Appadurai 1996: 12-3)。すなわち差異に何らかの意図性・目的性が付与される。そして、実体としての文化という理解から、差異の次元としての文化、という理解に転じ、集団のアイデンティティを明瞭化するために動員される差異を自然化する過程としての文化、という考え方を提示する (Appadurai 1996: 14-5)。ここでは文化、あるいは差異は差異化のための道具とされる。これは民族概念とエスノポリティクスを考える際に、重要な視点である。文化的実践は、他者との関係性において差異とアイデンティティの根拠となるのであり、そこで差異、あるいは文化の相互形成が行われる。しかし、差異の目的を差異化に置くというのは、同語反復である。その同語反復を逃れるには、現実の差異を帯びた身体の出会いにこだわるのが一つの方途となるのではないだろうか。そこでは他者性とは、決して「民族」などという単一の差異のみで規定されるわけではなく、差異が幾重にも重なって作り上げられる。

ジェンダー研究においても、一九八〇年代半ばまで、特定文化固有のジェンダー・モデルを提示することが、ジェンダー民族誌の主眼目だった。その後、民族誌が本質主義批判にさらされ、文化の葛藤や不定形性が着目されていくように、ジェンダー研究も、人種、セクシュアリティ、階層やそれ以外の意味ある差異がどのようにジェンダーを変容させるのかに注意を払うべきであると指摘されてきた。ジェンダーが他の差異や不平等の諸関係から全く独立して成り立つことも、そうした他の差異の言説の外に

存在することもありえないし、どのような差異が優先されるかは文脈によって異なり、一切前提することとできない (Moore 1994: 20-3)。このように、ジェンダーに関する多重の言説が錯綜し、文脈や特定の個人においても変化しうることを理論化しながら現実の中に見出していくことを、フェミニスト人類学は求められるようになった。

『差異への情熱』(Moore 1994)の中でフェミニスト人類学者ムーアが繰り返し強調するように、ジェンダーの差異が必ずしも他の差異に優先するわけではなく、階級や民族、人種、セクシュアリティ、その他さまざまな差異の中でジェンダーを位置づける必要がある。さらに、こうした前提を受けて中谷と宇田川は次のように提案する。「ジェンダーという差異がその他の差異とのかかわりの中でこそ意味を持つという事実が明らかにされたことで、ジェンダーの差異とは何かという根本的な問いをあらためて投げかけることが可能になったとも言える。そしてジェンダー人類学の課題は、この問いを本質主義的問いかけにはしない形で、なおかつ多様な社会の現実に寄り添いながら、追究していくことにあるのではないだろうか」(中谷・宇田川 2007: 323)。この提案に賛同しつつ、さらには、ジェンダーという差異を理解することで、文化・社会的な差異の問題自体へ、相互照射的に理解をもたらずジェンダー研究の可能性を提案したい。それができれば、ジェンダー研究は根源的な差異の研究として、人類学の根本命題に直接切り込むものになるはずだ。

このようにここでは、多重の差異の関係を生きる人々の日常的な実践を出発点とする。カレンと呼ばれる人々について、ローカルな実践と多重に彼らを巻き込む言説との相互関係の中で、ジェンダーと民族という差異が、交差するところでいかに相互に実体化され強化されるか、その様態を見極めることが第一の目標である。そしてその目標の向こうに、さらにこうした差異を相対化し、乗り越える道を見据

えたい。差異における権力関係のみではないつながりを見出すこと、さらには語る私自身と彼らのつながりを見出すことを目指したい。ここで「つながり」という言葉は、このように、差異を帯びて人々が出会う場面における、権力関係とは異なる関係性への可能性を検討するために用いる。以下では、民族とジェンダーの差異とその交差の様態について考察する。

民族とジェンダー

八〇年代後半以来の人類学における徹底的な本質主義批判を経て、民族論もはや過去の議論となった観がある。少なくとも、実体論一辺倒で民族が論じられることはもはやない。上からのカテゴリーの「名づけ」あるいは「呼びかけ」と下からの「名乗り」または「応答」⁽³⁾の相互関係という構図の中で理解するなら、ジェンダーと民族という差異は、どのような過程で生成し、交差し、相互構築し合うのか。具体的な検証は、言説と日常的な実践の場の両方から行われなければならない。ここであえて民族を問題にするのは、まさにジェンダーと交差するところで民族の差異が実践において意識化され、あるいは言説において強化されるその過程を見定めたいからである。

民族とジェンダー／セクシュアリティ⁽⁴⁾を論ずる上で、ここでは、三つのレベルの問題を考えてみたい。第一は、民族とジェンダーがそれぞれ差異の体系を構成する概念として持ってきた、ある近似した陥穽であり、分析概念に関わる。第二には、オリエンタリズムの系譜に連なる、他者との出会いとセクシュアリティを論じる議論であり、言説に関わる。航海、移動、旅行、植民地支配が展開するグローバルな時空の中で、西洋と非西洋、支配者と被支配者、旅行者と現地人が出会う場面、権力関係が赤裸々に介

在する場面で、支配者側が他者を描くときに自他のジェンダー／セクシュアリティはどのように構築されてきたのか。人種や民族とジェンダー／セクシュアリティが、より具体的には他民族の女性がどのようにに他者として性的に想像されてきたか。そこに見出される民族とジェンダー／セクシュアリティの交差の様態である。そして第三に、このように他者化される対象である人々自身が、どのような形で差異を身に帯びるのか、どのようにカレンの女性となるのか、アイデンティティはどのように形成されるのか、どこで差異が差異として重要になるのか、という実践の中の民族とジェンダーである。本書は、第一、第二の点に目を配りつつ、主目的としてはこの第三のレベルを論じる。以下ではこの三点について順にみていこう。

まず第一の問題、すなわち、民族とジェンダーの概念を論じる上で乗り越えるべき陥穽である。実体的論的エスニシティ論を解体する議論の中で、近代において、特に国民国家形成の過程でこそ文化を担う民族という実体を作り出されたことが論じられてきた。国民国家建設過程で、家族・親族・民族など、小さく親密な集団を結束させる引力として、「血」の共有や、土地の同源などによって原初的な感情を喚起し、アイデンティティを根拠に強い集団感情を動員する。つまり近代国家は、自らが否定するような非近代的な原初性の論理に実は大きく依存してきたのであり、それを可能にしているのは、私たちが思い描く「集団」感情のベースに、血や土の共有による「自然」化された集団が消しがたく存在したことである（Appadurai 1996: 146）。上から描くカテゴリーとしての民族とは、まさにそうした過程の産物である。これらの集団が国民国家にとりこまれ、また国家のイメージがこうした集団に重ねられていく。そのようにして歴史的に構築された社会分類としての民族が、抗しがたい力を持って社会生活を突き動かす実体のように誤認される。

カレン社会の民族間結婚について語る上で、「血」と民族の境界をとりざたしてきたのは観察者であり、当事者の口から、結婚相手の選択の基準として「血」が云々されることはない（七章）。身体により近い隠喩によって感情が喚起され、それによって社会集団や社会関係のあるべき姿が規範化されるのは、文化以前の自然によるのではなく、知識と力のレジームの結果であり、分析者のこたわりである（Yanagisako and Delaney 1995）。「血筋が絶える」「悪い血が混ざる」など、血の継承は私たちにとって強い感情を動員し、境界性と差異を生み出す重要な要因となってきたが、それは私たちをとりまく歴史的に構築された知識と力のレジームによって作り出されたものである。民族論の趨勢は、とうに実体論から状況論へと移行した観があるのに、いつまでも実体論に足をとられるのは、私たち自身がそうした知のレジームからなかなか脱却できないからだろう。

一方、人類学におけるジェンダー研究は、生物学的性差としてのセックスから、社会・文化的に規定される性差としてのジェンダーを分離して議論しようというところから始まった。フェミニスト論者はこれによって、身体性を媒介にしてあたかもそれが自然で、所与のもので永遠であるかのようにみせようとするジェンダー・イデオロギーに抗してきた。にもかかわらず、女性が産み育てる性であるという「生物学的事実」を文化／社会的事実から切り離して、個別の文化事象以前のすべてのジェンダー体系における中心的説明原理とする自明の前提から逃れられなかった（山崎 1987）。親族とジェンダーの人類学的理解に潜むこうした前提を問い直したのが、コリアーとヤナギサコである（Collier and Yanagisako (eds.) 1987）。親族研究もジェンダー研究も、人間の生殖に基づく男女の役割という「生物学的事実」を当然の大前提としてきたが、すべての社会で男であり女であることの説明と意味づけを当然のように、かつ暗黙に生殖に依拠することは、問題とすべき事柄を前提にしてしまう、と指摘している。

このように、民族とジェンダーという二つの差異の体系は、いずれも「自然」化された事実を暗に抱え込み実はそこに依拠していながら、表面上はその事実を否定することで概念として定義づけられている。したがって、一旦切り離れたはずの「生物学的」根拠に由来する原初性がつきまとう概念である。そして、いずれもが社会生活から政治権力まで、社会の多様なレベルに浸透したカテゴリーを形成する。

民族境界とジェンダー／セクシュアリティ

民族とジェンダー／セクシュアリティを論じる上での第二の問題は、この二つの差異が交差するところで生じる、自他の出会いにおけるオリエンタリズム的他者構築である。征服・侵略的に西洋と非西洋が出会う場における自他関係、特にその表象については近年、民族や人種とセクシュアリティの相互構築性が議論され、オリエンタリズムは、根本的にジェンダー化され、かつ性的なまなざしであることが論じられてきた。ヨーロッパの人々は冒険先で出会う人々をエキゾチックな他者とし、他者を女性化し、他者のセクシュアリティに想像力をかきたてられた (Manderson and Jolly 1997: 1-2)。西洋による侵入・侵略の対象としてのオリエンタルは、女性化され、かつ性的に過剰・豊穡なものとして描かれることによって、欲望と忌避の不可思議な対象とされたのである。そして、他者をその未開と放埒、非道德的な性の風習をあげつらうことで非難し、自らの性的名誉や道徳をよきものとして守り、これを性も含む侵略の口実としてきた。集団の性のイデオロギーは、他者・他民族を性的に異なる劣位なもの、自らを正しく規範的なものと見なし、他者は過度に性的、あるいは逆に性的に貧困、異常、危険とされ、他者なる女性性は過剰に性的な者として誘惑的に描かれた。しかも、他者の性との関わりには権力の非対称に基づ

く二重規範が存在する。白人女性への他者男性による侵略は許さない一方、白人男性による他者女性と関わる越境行為は不問に付されるのだ。こうした自他の境界と差異の認識は、欲望と忌避、魅惑と嫌悪の両方を喚起する。エキゾチックとエロチックが相互構築され (Nagel 2003: Jolly 1997: 99)、性と政治の権力関係が絡むのである。

さらにストラーは、サイドが指摘するようにオリエントへのまなざしの中で西洋近代が自己のアイデンティティを獲得していったのと同様に、オリエントへ向けられた性的なまなざしが、西洋自身のセクシュアリティを確立していったのだと論ずる (Stoler 1995: Said 1978)。他者の性的過剰と豊穡の描写そのものが、自己の欲望やセクシュアリティを映し出す鏡だったと言っているのである。それはストラーが批判するように、フーコーの西洋セクシュアリティ研究に欠如した視点である (フーコー 1986)。また、カルチュラル・スタディーズの手法を用いて、民族とセクシュアリティの関係を論じるネーゲルは、私たちの性的指向性や規範は、他者との関係と対比の中で作られていくのであり、人種的言説が語られる裏でセクシュアリティがささやかれる、としている。民族の境界形成のプロセスにおいて、性が重要な位置づけを与えられ、民族と性の交差するところで、まさに両者の実体化が最も説得力のある形で行われるのである (Nagel 2003)。

他者を性的なものと見なすまなざしは、西洋とオリエントの関係に限られたものではない。中国の少数民族民族ミャオとナシヨナリズムについて研究したシェインは、他者なる少数民族女性性は、エキゾチックで伝統的な過去の残存として保たれるのみならず、エロチックな魅惑の客体となると論じ (Schein 2000: 1589)、都市漢人が伝統的でローカルな他者を消費することが、漢人のナショナル・アイデンティティ構築の一端であるとする。また、多様性の中で漢文明のアイデンティティを生成する過程で、内なる他者

としてミャオが果たしてきた役割を論ずる。民族、ジェンダー、階級、地位などの特定の差異が政治的に色づけされることにより、中国の内なる多様性が、順序づけられた社会秩序として形成されていくことを指摘している。

上述したセクシュアリティをめぐる文化の相互交渉は、現在のグローバル化する移動と流動の時代にあつて、現実にもまた幻想においてもさらに拍車がかかる。セクシュアライズされたタイをめぐる言説もこうした文脈で理解される(三章)。他者へ向けられる欲望が、性の消費市場の文脈で操作されるのである(Manderson 1997: 123-5)。さらに西洋における性のあり方が、他者の性に関する経験や知識、見方によって作り出されるという自他の相互関係は、そのコンテキストを拡大させている。グローバル化する性の市場の構築は、ポリティカル・エコノミーの文脈ばかりではなく、人種主義と性差別の交差するところで生じることをみる必要がある(Enloe 2000; Trinh T. Minh-ha 1989)。内に向かうナショナリズムにおいては母性が語られ、空間を横断するグローバルイズムのもとでは他者女性のセクシュアリティが強調されるのである。三章でみるように、西洋諸国や日本からみたタイの女性、タイのセクシュアリティを構築するまなざしは、タイ国内で内なる他者としてのマイノリティの女性に向けられるまなざしと重なり、同じ構図の繰り返しと連なりを成している。大きな構図として以上のことをおさえておきたい。

右に挙げた視点は、支配側からみた他者をめぐるセクシュアリティの語りから出発している。逆に、語られる側の実践の中では、他者との出会いはどのように位置づけられるのだろうか。これが民族とジェンダー／セクシュアリティを論じる第三の問題であり、本書の主眼でもある。出会いの場で自他の差異がどのように認識され、どのように自他関係が形成されるのか、すべて支配と権力の関係で説明されるものだろうか。山地において「カレン」女性が「非カレン」男性と出会う場面で、どのような差異の相

互認識が進行するのか。それは、ここまで述べてきたような権力関係の中ではぐくまれた相互認識と決して無関係ではない。しかし、そればかりでは理解できない実践の場の関係性があるのではないだろうか。

実践にみるジェンダー化された身体

山地カレンの村で調査を始めてみると、日々村のあちこちで儀礼が行われていた。しばらくして理解するようになったのは、日常生活の場である家々の作り、家の空間の中の日常的な人の配置や動作（四章）、家畜の飼いや消費行動、そして社会関係や生活の全般が儀礼実践と密接に関わっているということとだった（五章）。また、男女の一生を通じた日常実践をみていくと、そこにはジェンダーと既婚・未婚、年齢や社会的な位置づけなどの差異があり、儀礼においてそれが行為遂行的に形成されていた（六章）。その意味で儀礼と日常実践と、人が男として女としてジェンダー化された主体となっていく終わりなき過程は、不即不離であり、儀礼実践自体は、何か集約された意味の体系、文化の隠喩として解釈すべきものというより、日常実践や社会過程と連なり換喩的な関係にあるものと理解すべきである。

前述のようにジェンダーは、身体の性としてのセックスを離れて文化的構築物と定義されてきた。しかし、そもそも社会的カテゴリーは可変的で本質主義から逃れられるが、自然的なカテゴリーはそれにはまってしまう固定的なものだという見方は、身体と権力をめぐる議論等によって否定されてきた。その一方で、ジェンダー化された身体がどのように形成されるのかは十分検討されてこなかった。プロク「デュ」とルディーは、これまでの人類学における身体の研究を振り返り、次のように批判する。身体論の

分析関心は人体の表象にのみ集中して、男女の身体を形作り、訓練し、管理する社会実践には注目してこなかったし、近年のフェミニスト研究も物質的な身体^{マテリアル}についてはほとんど言及してこなかった、と (Broch-Due and Rudie 1993: 26)。⁽⁶⁾

第二部では、日常実践としての衣食住やライフサイクルと儀礼を通じて、まさにそうした過程の検証を目指す。ただし、儀礼や日常実践をテキストとして解釈し、何らかの意味を見出そうというのではない。ジェンダー化された身体としてのカレンの男女が、実践を通じて主体化される過程とその動態を明らかにする。たとえば、住空間に着目することは、構造化された時空の中で行為する身体に目を向けていくことになる(四章)。行為者は日常的な世界との関わりの中で、必ずしも意識的にではなく、自らをとりまく世界の文化的意味の解釈と再解釈を繰り返す。身体とその文化的原理の遂行に関して、ブルデューは、身体化は常に過程であり、決して完成することではなく、身体が完璧に社会化されることはないことを強調する (Bourdieu 1977)。すなわち、実践とは単に反復によって文化的な規則を覚え身体化することではなく、身体を通じて社会的差異についての理解に到達することであり、繰り返される実践は解釈のモメントであって、そこに創造性と変革の余地があると言っているのである。行為は、言説的操作がなくとも、実践による批判的自己回帰でありうる。

しかし、ブルデューの議論における身体は、集団化された概念であり、個人の体験や動機づけは考察対象となっていないため、カテゴリーの中の差異の問題に無力で、多重の主体化という問題には対処できない、とムーアは指摘する。身体化された知が、自らを囲む空間によって単純に主体化されるにすぎないのなら、抵抗や矛盾、そして変革は説明しにくい。この点についてムーアは、二つの議論を試みる (Moore 1994: 82-5)。第一に、身体的実践と言説的解釈の不一致の可能性である。実践と言説の解釈が

いつもびたりと一致すると考えるのは現実的でない。むしろそれらはしばしば不一致である。言葉にできないことが、行為において反復されることもある。身体的知は、私たちを拒否することも背くこともできると言うのだ。第二は、抵抗と「意識」の問題である。抵抗は、考えられたものでもなく、多くの場合、組織化されてもない未完成のものである。実施される前から言説化されるのではなく、逆である。支配的言説も不確定で、解釈と再解釈を経て、実践的行為の変化によって少しずつ変化する。実践上の小さな変化が新しい解釈をもたらし、それ自体が、これまで行われてきたやり方に対して批評を加えることになる。このように、日常的な実践が意味の基盤をずらしたり、読みかえを可能にする。家の間取り、衣装、食事などのマテリアルな世界における物理的な関係を再編することによる抵抗は、ジェンダーの社会関係にとっても重要性を帯びる。身体そのものが本質的、自然的に何らかの差異を明示しているのではなく、身体への効果として差異が生み出される。だとすれば、身体に差異が読み込まれ、読み直されていく過程は、衣食住などの日常的な実践や儀礼の反復と動態の中からこそ見出される。

日常実践によってそうして身体化された差異は、異なる他者の実践との接触面において、多重の差異の認識と自己関係を生み出すことに注目する。

選択する女性／語る民族

一九八〇年代当時、ムラでは未婚既婚を問わず九割の女性は民族衣装を日常的に着用しており、女性については衣装から立ち居振る舞い、内外の人づきあいなどについてかくあるべき、という像が語られるのを日常的に耳にした。しかし、だからといって女性の衣装が画一的だったかという点、特に未婚の

女性についてはずいぶん多様だった。何を着るかは、若い女性の選択として最も日常的に目に見える、ある種の態度表明である（六章）。さらには、教育機会、他村での労働、結婚相手、そして結婚後は居住地、儀礼の続行、出産と産児制限、育児など、一つ一つの選択・決定がムラにおける社会秩序の再生産となるのか、そこに一石を投ずるのか、小さいなりに意味あるものとなる。では、彼女たちはこうした選択・決定をするにあたって、何を参照するのか、意識的に何かの結末を予測して合目的に選択するのだろうか。それは、どのような言説に対する異議であるのか、あるいは恭順であるのか、変革をもたらしうるのだろうか。

バトラーによれば、ジェンダー・アイデンティティは、ジェンダーの首尾一貫性を求め規制する実践によって否応なく行為遂行的に生み出され、ジェンダーは身体の様式化を通じて生み出される。身体の手振りや動作と多様なスタイルが永続的にジェンダー化された自己という錯覚を作り上げていき、パフォーミング・アイデンティティ（行為遂行性）を通じて、ジェンダーは社会的に構築されていく。言説以前に主体は存在せず、言説において呼ばれ、名づけられて主体となり、アイデンティティを持つ。しかも呼ばれ、名づけられることによって生み出されるのは、変わらぬ一個の近代的主体ではない。不安定ながら自ら語る力を持つエイジェントがそこで生まれる。つまり権力の作用としての呼びかけは、それに応じる「従属する主体」を生み出すが（アルチュセール 1975）、バトラーにとってそれはエイジェントとしての抵抗の場となる。エイジェンシーは記号化以前の「我」に見出されるのではなく、その記号化の構築過程のただ中で発動され自らを生み出した社会的条件の中にこそ、それに対抗し変化をもたらす突破口が見出せる。ただしそれは、自らの意志で合理的な目的によって行動する近代的個人ではない。そこに、仕掛けにからめとられた受動的な存在と化するか、自由な自己決定をする主体となるか、という二者択一がある

わけではない。そうではなく、被構築性の中でこそエイジェンシーが可能になる (Butler 1990)。主体は、特定文化の歴史空間の中で多重な言説によって構築されており、その中で、不安定ながら語りかける言説空間を見出すことができる、と言うのだ。構築された主体は、身体的実践を通じて自らの構築過程をずらし、変革する可能性をもつ。

個人が多重に主体化され、それが相互に矛盾するという事実は、合理的選択や合目的決定では到底説明できない (Moore 1994: 58)。また、個人は自らをとりこむ多重の言説と自らの多重な主体化を認知できるとは限らない。つまりどのような選択肢があるのか、歴然と目の前に並べられた中から選択するというものではないのだ。選択の可能性について必ずしも意識的ではなく、実践の中で選択は行われる。選択肢も横並びではない。言説の歴史的背景や文脈のゆえに、ある選択は「得」、あるものは「損」であったり、危険な場合もある。支配的でない言説が個人的には満足のいくものであったり、支配的な言説に挑戦したり抵抗するものであるとしても、抵抗し挑戦する個人は、社会的なリスクを負うことになる。こうして主体は多重な差異、競合するアイデンティティの場として理解される。個人は多重の言説の中で多重に主体化される。このように理解すると、相反するものが同居しうることになり、固定的で安定した主体を想定するよりも、個人がどのように多くの矛盾する主体化に依拠するのかという問題に対応できるようになる。アイデンティティは、多元的可変的で、自己矛盾を含むものとなる。主体は従来人類学が想定してきた合理的、安定的で首尾一貫し、かつ男性たる主体ではなく、差異が競合し混在する場と位置づけられる。個人は単一のジェンダー体系のモデルによって社会化されるのではなく、多元的に主体化する。そのため、ジェンダーをめぐる多重の言説の間で齟齬や相違があり、それが、抵抗や拒絶の場とも変革の可能性ともなりうる。そのようにみること、個人が相容れない複数の言説の中

でジェンダー化され、アイデンティティを獲得する過程を分析するフェミニスト民族誌が可能となる。

つながりの契機としての差異——フェミニスト民族誌

民族とジェンダーの差異について、三つのレベルの議論を行ってきた。第一に、差異の概念としての民族とジェンダー自体がそれぞれ内包する前提の考察。第二に、支配的言説の中でいかに民族とジェンダー／セクシュアリティが結びつきやすく、さらなる他者化と支配や搾取をもたらすか。そして第三に、民族とジェンダーという差異がどのように実践と語りの相互関係において形成され、交差するところで強化されるかを考察してきた。差異を担う当事者はその多重の言説の中でいかに主体化し（され）、何を選択し、どのように抵抗するのか、これが最も重要な問いとなる。

そして、その向こうにさらに二つの問題意識を据えている。第一は、すべての差異は支配と権力の関係なのか、という問題である。第二は、そのような差異を分析し語る民族誌を書くことが含む問題であり、この二つは密接に関連している。

差異を名づけ、定義し、固定するのは権力である。それが国家やメディアなどのマクロなレベルのものであれ、より限定的な集団に共有される規範的言説によるものであれ、さらによりミクロな相互関係において作用するものであれ、差異とそれに伴う不均衡な力関係を固定化する政治的な力である。では、あらゆる差異は支配と権力関係に収斂されるものなのだろうか。また、彼方の少数民族を差異化して表象することは、民族の文化を本質化する過程に記述者も参与し、権力関係による差異の構築に加担することになる。このディレンマにどのように抗すればよいのだろうか。

山地カレン社会における男女関係は、女性にとって決して一元的に抑圧的なものではない。男と女とは、カレン語の夫婦関係「ドモワ」「ワ＝夫」と「モ＝妻」の「ド＝つながり、関係、パートナー」の「ド」という言葉によっても示されるように、差異を抱えた二項のつながりであり、関係性である。民族間の関係にしても、彼らはしばしば「ドブウェ」（兄弟と弟妹のつながり）という言葉を用いる。彼らの実践の中で「差異」を理解するならば、そこに関係性とながりへの契機が見出せるのではないだろうか、本書では、その契機を見落とさない記述を心がけたい。田辺は、ジェンダーの差異は、支配と抑圧を生むという一面とともに、エロスに基づく相互交歓を可能にするものであることを強調し、差異を越えた同一性への可能性を内包していると論じる（田辺明生2006）。ジェンダーの関係が、相異なるもの同士の関係性の原型だとすれば、差異とは関係性の契機であり、必然的に支配・被支配やカテゴリーの本質化と固定化をもたらすものではない。このような差異の両面性、すなわち固定的な権力関係へ向かう差異という側面とともに、そうした関係に包含されつつも、常に存続し続けるつながりへの契機としての差異の可能性を追求したい。

繰り返しになるが、差異へのこだわりは人類学の営みの根幹にあり、人類学はその差異の言説に確実に参加してきた。他文化を実体化する語りは、語り手と語られる他者との権力関係が生み出したもので、かつその関係を強化するものと批判されてきた。中でも一九八〇年代の人類学におけるジェンダー研究は、特定社会の意味世界の中で、ジェンダーが文化的に構築されるさまを文化相対主義的に描く民族誌を多く生み出した。しかし一九八〇年代末には、こうした民族誌における先進国女性フェミニストたちによる第三世界へのまなざし⁽¹⁰⁾、記述、介入に対して、第三世界の女性たちから、批判の声が上がるようになった（Trinh T. Minh-ha 1989; Mohanty 1991）。こうした批判は、民族誌全般への批判と通じるもの

であるが、先進国フェミニストへの第三世界からの批判はさらに痛烈である。すなわち、連帯を装って彼女たちを特定の学問領域の枠の中に収めて表象すること、現実には多様でしかもさまざまな主体の方向性を含む「特定社会の女性たち」について一元化し、対象化して表象することで、権力の立場から現実を構築していると糾弾する (Mohanty 1991)。実体化された差異を描き出すことで権力関係を基盤とする他者化が行われるとすれば、逆に、「女性」カテゴリーに基づいて自我を同化することはさらに大きな陥穽であることもまた、フェミニスト人類学の戒めである (Stacey 1991)。

それでは、自分たちの生活とある意味で遠いところにいる女性たちの日常を描くことは、そこに不可避に含まれる権力作用のゆえに、もはや放棄すべきなのだろうか。そうではなく、権力作用を認めつつ、自我を知る実践としての記述を続けるべきではないか。他者の生活について書いたり述べたりする上では、ポジショナリティや表象性の問題を常に意識し (中谷 1997)、「その語りがあらたな支配関係や搾取の構造をもたらしなように、自らが依って立つ場を批判的に見つめなおす必要がある」 (川橋 2000: 12)。人類学者はどのように、他者の文化を実体化することなく表象することができのかという問題に取り組んだアブルゴッドは、「文化に抗する」記述を提唱する (Abu-Lughod 1991)。さまざまな戦術を駆使して自他の権力関係を強化する「文化」を回避して、言説と実践に注目した「特定のものの民族誌」を通じて、他者化に至る自他の差異のみでない、共通性に思いを馳せる記述を目指そうというのである。

グローバル化とは、すべてがグローバル・スタンダードに収斂されていく単純な過程ではないことは言うまでもないが、確実に私たちと、他者の生きる場を同時代の、同じ世界のものにしていく。北タイの山地に住む人々の生活と、私たちの生活は「無縁」と言い続けることはできなくなっている。そして、自分たちと連なる力やモノの網の目をたどっていったときに、向こう側に彼らがみえる。その彼らをと

りまき、私自身もそこに立っている力やモノの網の目の中で、彼らはどのように生活を営んでいるかを描くこと、その表象の過程で彼らの生活実践のあり方を描き込むような記述をすることが、彼らとのつながりを求めるフェミニスト民族誌のとるべき道ではないだろうか。つながりの契機としての差異は、対象社会で見出される男女や民族の関係性についてのみならず、私たち研究者と研究対象の人々との間にも見出せるはずである。

差異の様態を解明する最終目標は、記述する私と記述される彼らの間の力関係を目をつぶることなく、なおそこに、差異をつながりの基盤と化す方途を見出すことであると考える。関根は、中心からの語りを脱して、「生きられる文化」を「語られる文化」に回収されない方法で表象することを提唱する（関根 2006: 282）。これは、実際に記述と分析を始めてみると容易ではない。北タイ山地の人々について記述するとき、権力や支配の構図の中で彼らについて記述する方がはるかに容易なのである。そのための言葉はすでに用意されているからだ。ところが、中心と周縁の軸を外して、脱中心化のベクトルを模索するためには、別の語彙が必要になる。それには、「生きられる文化」としての実践に接近することが第一歩である。同時代の体験を共有する人々として、一つの構図の中にそれぞれ位置づけられたものとしてのつながりを想像しながら描く。想像を超えたエキゾチックな他者として表象するのではなく、男であること女であることに関する先進社会の標準を「普遍」として当てはめるのでもない。そうではなく、彼らの生活実践とその変化をたどり、またその中で彼らの多様な主体とアイデンティティ形成のたゆまない過程を描くことによって、「つながり」を求めていきたい。

本書の目的は、民族とジェンダーという差異の相互作用の解明である。当事者である少数民族の男女が、重層的な権力と意味の世界にあってどのように生活実践の場からこれに対処し、これを変えうるの

かを検証することである。そのことを通じて、私たちと北タイ山地の彼らとのつながりを見出したい。